

大学生の方言や訛り

(アクセント・イントネーション) に対する意識

佐藤 聡太 (文教大学情報学部メディア表現学科)

1. はじめに

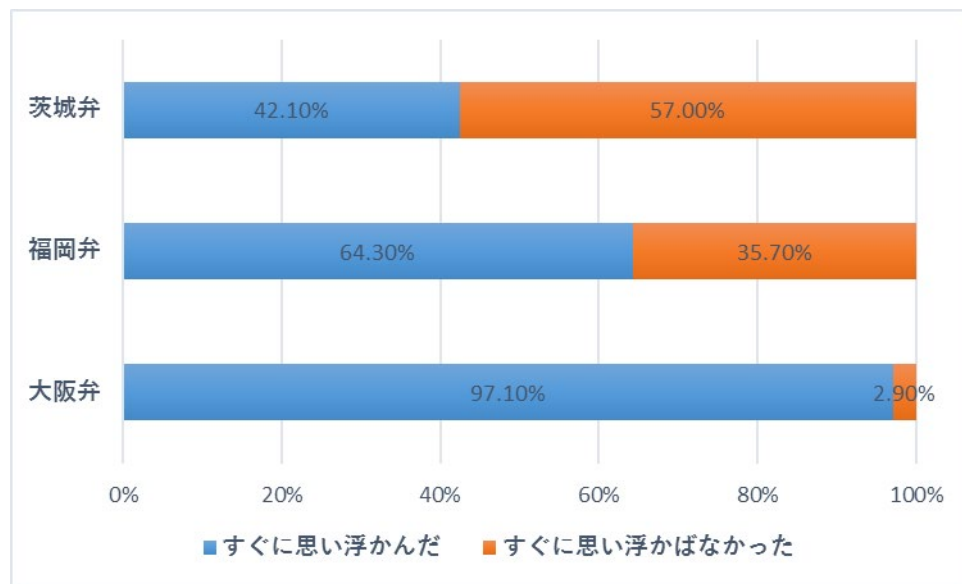
方言とは、共通語・標準語に対してある特定の地域だけで使用される言葉のことであり、俚言(りげん)とも言う。日本全国に16種類存在すると言われている。また、訛りとは、ある地方特有の発音のことであり、標準語に比べて、地域特有の発音をさす(『違いの分かる事典』より)。

私は、大学に入学して新しい友達と会話し始めると、すぐに友達は私が話したことに対して何度か笑われたことがあった。次第に仲良くなると友達が「言い面白いね」などと言ってきた。私は何が面白いのかさっぱりわからず問いただすと「違和感がある」と言われたことがある。私の発した言葉のイントネーションが友達と違っていたのである。私は福島県いわき市に生まれ育った。これまで、そのようなことは一度も言われたことが無かったため、驚きと恥ずかしさを最初に感じた。最初は自分の訛りをなんとかして無理矢理改善しようとした。しかし、友達から「それが福島の人言い方なんだね」と言われたとき以来、「福島県民」ということを強く意識するようになった。福島の訛りを無理に直す必要はない、自分のキャラクターの一つとして持ち合わせておこうと思った。

私のように方言や訛りについて悩んだことや考えたことがある人は、私のほかにも多くいるだろう。関東地方、中でも東京や神奈川、千葉といった首都圏ではほとんどの人が共通語を使っている。テレビにおいても多くの人が共通語を使っているが、関西地方出身で関西弁を話す芸能人も多い。それは日本の第二の都市である大阪を中心とした近畿地方にも人口が集中し関西弁を使用している人が多いためであろう。関西弁に関してはやはり使用する人の多さやメディアの露出によって東日本においても馴染んでいきていることから東北出身の私も特に違和感を覚えることはない。

酒寄は方言に関する調査をしており、方言のイメージの想起について聞くため大阪弁、博多弁、茨城弁に分けてそれぞれどのくらいの早さで思い浮かぶか質問したところ、図表1のような結果となった。大阪弁は97.1%がすぐに思い浮かんだと答え、その次に博多弁で64.3%、茨城弁は42.1%だったことを受け、「茨城弁は他の2つの方言よりあまりイメージが思い浮かばないということが見て取れる。このことから、大阪弁は多くの人に認知されているということがわかる」と述べている。(図表1)(酒寄, 2018年)

図表1 方言イメージの想起（参考文献を元に筆者作成）



「かっこいい」と思われる方言や訛りがある一方で、私のように「面白い」とも言われる方言や訛りが存在する。多く耳にする機会がある大阪弁に対して、東北の方言や訛りはあまり耳にされないのだろう。あまり耳にされない方言や訛りが、聞く側にとっては面白くても、話す側にとっては恥ずかしいと感じる。多くの方言や訛りはそうであろうと考える。酒寄も「多くの方言は、表現の仕方や時と場合によっては、良く聞こえたり、逆に印象が悪くなったりもするという事なのである」と述べている。（酒寄, 2018年）

方言や訛りについて私と同世代の人が通う現在の大学では大学内や日常において方言や訛りを使っているのか、方言や訛りに対してどう思うのか、考えているのか。方言や訛りの例文に対する意識を中心に大学生の方言や訛りの有無と方言や訛りに対する考えの違いを考察し、また、方言や訛りに対する考えと地域の文化や習慣、伝統文化や歴史に対する考えの関係性なども考察するため、調査することにした。

また、本報告書を作成するにあたり、本調査だけでなく予備調査においても有意な調査結果を得ることができた。そのため、予備調査の結果も用いて2つの調査結果を元に考察していきたい。そこで、「3. 調査結果」より予備調査を第一調査、本調査を第二調査として述べていく。

2. 調査研究の方法

2-1. 進捗経緯

- 4月～6月 : 調査テーマ討論・テーマ決定
- 7月～8月 : 予備調査実施・集計
- 9月～11月 : 本調査検討・調査票作成

12月～1月 : 本調査実施・集計
1月～2月 : 詳細分析・報告書作成

2-2. 調査概要

【予備調査】

調査時期 : 2019年7月19日(金)
1授業で実施
調査対象者 : 文教大学湘南キャンパスの大学生
配布数・回答数 : 配布数100 有効回答数91 回収率91.0%
調査方法 : 調査票を用いた自記式の集合調査

【本調査】

調査時期 : 2019年12月17日(火)
1授業で実施
調査対象者 : 文教大学湘南キャンパスの大学生
配布数・回答数 : 配布数150 有効回答数135 回収率90.0%
調査方法 : 調査票を用いた自記式の集合調査

また本調査では、予備調査とは大きく違う方法として調査票に加えて音声データも使用した。回答者に対して音声データを流すことで、方言のみならず訛り(アクセント・イントネーション)についても各方言で印象の違いがあるかを知るためである。

2-3. 主な質問項目

- ・回答者の出身地における方言
- ・訛りの有無
- ・方言や訛りが出てくるかどうか
- ・方言や訛りが出てきたときにどう思うか
- ・出身地において方言や訛りを使っているか
- ・方言や訛りを見てどう思うか
- ・方言や訛りを聞いてどう思うか

※以下より、予備調査を第一調査、本調査を第二調査とする。

3. 調査結果

3-1. 回答者の基本属性

今回の調査は、第一調査においてはサンプル 91 名のうち、「男性」38.8% (33 人)、「女性」61.2% (52 人)、「無回答」が 6 人で、やや女性のほうが多い結果となった。

第二調査においてはサンプル 135 名のうち、「男性」が 58.7% (64 人)、「女性」が 40.4% (44 人)、「その他・無回答」が 27 人で、第一調査とは反対でやや男性のほうが多い結果となった。

回答者の学年の割合は、第一調査においてはサンプル 91 名のうち、「1 年」が 92.9% (79 人)、「2 年」が 4.7% (4 人)、「3 年」が 1.2% (1 人)、「4 年」が 1.2% (1 人)、「無回答」が 6 人で、1 年生が大きく割合を占めていることが分かった。

第二調査においてはサンプル 135 名のうち、「1 年」が 0.9% (1 人)、「2 年」が 54.1% (59 人)、「3 年」が 36.7% (40 人)、「4 年」が 8.3% (9 人)、「無回答」が 26 人と、2・3 年生の割合が高いことが分かった。

回答者の学部の割合は第一調査においてはサンプル 91 名のうち、「情報学部」が 98.8% (84 人)、「健康栄養学部」が 1.2% (1 人)、「無回答」が 6 人と、情報学部の割合が高いことが分かった。

第二調査においてはサンプル 135 名のうち、「情報学部」が 99.1% (108 人)、「健康栄養学部」が 0.9% (1 人)、「無回答」が 26 人と、同じく情報学部の割合が高いことが分かった。

3-2. 回答者の出身地と方言や訛りの有無

はじめに回答者の出身地を知るため、第一調査では「出身地」について、第二調査ではより細かく回答者の出身地を分けるため、「生まれたエリア」、「育ったエリア」に分けてそれぞれ質問した。なお、選択肢は第一調査と第二調査の 2 質問全て同じ選択肢であり、「北海道、東北、関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州、沖縄、その他」とした。

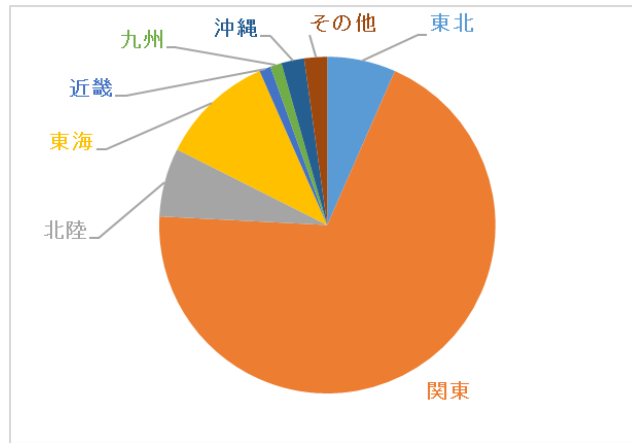
第一調査においては「東北」が 6.6% (6 人)、「関東」が 69.2% (63 人)、「北陸」が 6.6% (6 人)、「東海」が 11.0% (10 人)、「近畿」が 1.1% (1 人)、「九州」が 1.1% (1 人)、「沖縄」が 2.2% (2 人)、「その他」が広州、上海一人ずつで 2.2% (2 人) という結果で、関東出身の割合が大きいことが分かった。(図表 2)

第二調査では、前述したように「生まれたエリア」、「育ったエリア」に分けて質問した。「生まれたエリア」では「北海道」が 1.5% (2 人)、「東北」が 6.7% (9 人)、「関東」が 68.1% (92 人)、「北陸」が 6.7% (9 人)、「東海」が 6.7% (9 人)、「近畿」が 1.5% (2 人)、「中国」が 0.7% (1 人)、「四国」が 1.5% (2 人)、「九州」が 3.0% (4 人)、「その他」が 3.7% (5 人) という結果であった。「沖縄」と回答した人がいないことが分かった。(図表 3)

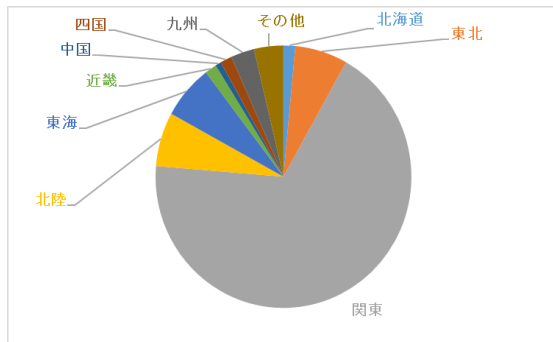
「育ったエリア」では「北海道」が 0.7% (1 人)、「東北」が 6.0% (8 人)、「関東」が 72.4% (97 人)、「北陸」が 6.0% (8 人)、「東海」が 6.7% (9 人)、「近畿」が 0.7% (1 人)、「四国」が 1.5% (2 人)、「九州」が 2.2% (3 人)、「その他」が 3.7% (5 人)、「無回答」が 1 人という結果であった。「中国」、「沖縄」と回答した人がいないことが分かった。また、「生まれたエリア」、

「育ったエリア」に共通して「その他」に含まれる回答としては「台湾」があった。(図表4) 第一調査、第二調査ともに、回答者は関東地方出身者の割合が高いことが分かった。

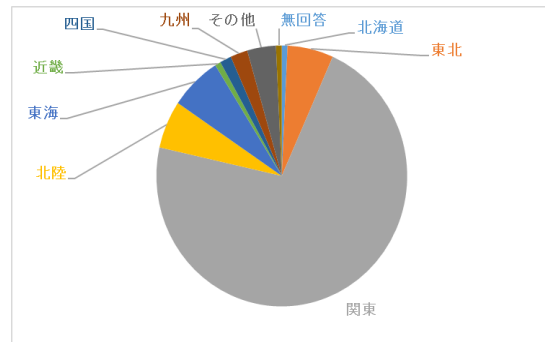
図表2 出身地の割合 (第一調査における)



図表3 生まれたエリアの割合 (第二調査における)



図表4 育ったエリアの割合 (第二調査における)



第一調査では回答者の出身地、第二調査では生まれたエリア、育ったエリアにおいて方言や訛りの有無を聞くため、第一調査と第二調査それぞれにおいて「ある」、「ない」、「わからない」の三つの選択肢を設けて質問した。そして第一調査では出身エリア別、第二調査では生まれたエリアと育ったエリア別の方言や訛りの有無をクロス集計表で整理した結果、図表5、6、7のようになった。

まず、第一調査では5%水準で有意に関連が見られた ($\chi^2(16)=31.023, p<.05$)。クロス集計表の結果から、方言や訛りが「ない」と答えた人がいたエリアは関東エリアだけであったことが分かった。このことから有意差が見られたと言える。

図表 5 出身エリアにおいての方言や訛りの有無（第一調査における）

		出身地に「方言」「訛り」があるか			合計
		ある	ない	分からない	
出身エリア	沖縄	2	0	0	2
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	その他	2	0	0	2
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東北	6	0	0	6
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	関東	22	35	6	63
		34.9%	55.6%	9.5%	100.0%
	北陸	6	0	0	6
100.0%		0.0%	0.0%	100.0%	
東海	9	0	1	10	
	90.0%	0.0%	10.0%	100.0%	
近畿	1	0	0	1	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
九州	1	0	0	1	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
合計		49	35	7	91
		53.8%	38.5%	7.7%	100.0%

次に、第二調査では生まれたエリアにおいて、5%水準で有意に関連が見られ（ $\chi^2(18)=35.530, p<.05$ ）、育ったエリアにおいては、5%水準で有意に関連が見られた（ $\chi^2(16)=31503, p<.05$ ）。このことから、第二調査においても方言や訛りが「ない」と答えているエリアは関東エリアがほとんどを占めていることが分かった。

図表 6 生まれたエリアにおいての方言や訛りの有無（第二調査における）

		出身地の「方言」「訛り」の有無			合計
		ある	ない	分からない	
生まれたエリア	北海道	2	0	0	2
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東北	7	1	0	8
		87.5%	12.5%	0.0%	100.0%
	関東	35	39	18	92
		38.0%	42.4%	19.6%	100.0%
	北陸	9	0	0	9
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東海	8	0	1	9
		88.9%	0.0%	11.1%	100.0%
	近畿	2	0	0	2
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
中国	1	0	0	1	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
四国	2	0	0	2	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
九州	4	0	0	4	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
その他	3	1	1	5	
	60.0%	20.0%	20.0%	100.0%	
合計		73	41	20	134
		54.5%	30.6%	14.9%	100.0%

図表7 育ったエリアにおける方言や訛りの有無（第二調査における）

		出身地の「方言」「訛り」の有無			合計
		ある	ない	分からない	
育ったエリア	北海道	1	0	0	1
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東北	7	0	0	7
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	関東	39	40	18	97
		40.2%	41.2%	18.6%	100.0%
	北陸	8	0	0	8
		100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東海	8	0	1	9
		88.9%	0.0%	11.1%	100.0%
近畿	1	0	0	1	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
四国	2	0	0	2	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
九州	3	0	0	3	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
その他	3	1	1	5	
	60.0%	20.0%	20.0%	100.0%	
合計	72	41	20	133	
	54.1%	30.8%	15.0%	100.0%	

3-3. 回答者の方言や訛りの使用について

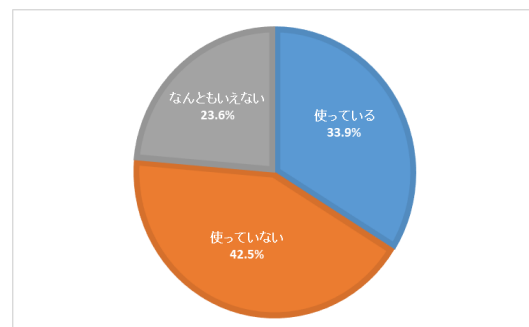
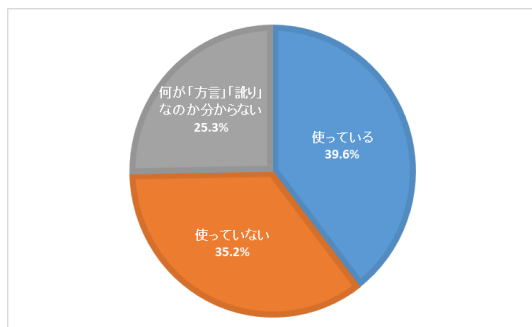
3-3-1. 回答者の出身地における方言や訛りの使用

まず、回答者の出身地において方言や訛りは使っているのかを知るため、第一調査、第二調査それぞれにおいて質問した。

第一調査では、「使っている」、「使っていない」、「何が「方言」「訛り」なのか分からない」の3つの選択肢を設けて質問した。結果は下記の図表8のようになった。「使っている」と答えた人は39.6%（36人）、「使っていない」と答えた人は35.2%（32人）、「何が「方言」「訛り」なのか分からない」と答えた人は25.3%（23人）だった。この結果から、使っている人と使っていない人がほぼ同じ割合を占めており、出身地にいるのにも関わらず方言や訛りを使っていない人が多いことが分かるだろう。また、「何が「方言」「訛り」なのか分からない」と答えた人も予想よりも多かった。

図表8 出身地において方言や訛りを使っているのか（第一調査における）

図表9 出身地において方言や訛りを使っているのか（第二調査における）



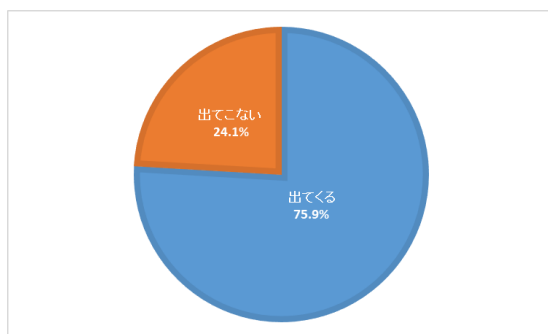
第二調査では、第一調査の結果を元に選択肢を一部変更し、「使っている」、「使っていない」、「なんともいえない」の三つの選択肢を設けて質問した。結果は上記の図表 9 のようになった。「使っている」と答えた人が 33.9% (43 人)、「使っていない」と答えた人が 42.5% (54 人)、「なんともいえない」と答えた人が 23.6% (30 人)、無回答が 8 人だった。この結果から、「使っている」と答えた人の割合が第一調査に比べて小さくなり、「使っていない」と答えた人の割合が大きくなっていることが分かった。「なんともいえない」という選択肢は、第一調査では「何が「方言」「訛り」なのか分からない」と選択肢に入れているため言葉の捉え方が異なってしまったことも要因として考えられるが、やや割合が小さくなっていることが分かった。

3-3-2. 回答者の大学における方言や訛りの使用

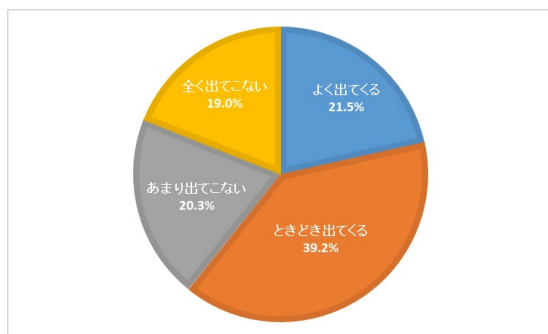
次に回答者が大学において方言や訛りを使っているかを知るため、大学において方言や訛りが自然と出てくるのかを質問した。第一調査では「出てくる」、「出てこない」の二択、第二調査では「よく出てくる」、「ときどき出てくる」、「あまり出てこない」、「全く出てこない」と段階式の選択肢に変更してそれぞれ質問した。

第一調査では、Q2 において「ある」と答えた回答者のみに対して、大学において方言や訛りが自然と出てくるかがあるかを聞いた。結果は下記の図表 10 のようになった。「出てこない」と答えた人が 75.9% (41 人)、「出てこない」と答えた人が 24.1% (13 人)、無回答が 37 人であった。この結果から、回答者の 8 割近くが「出てくる」と回答しており、出身地においていかに方言や訛りを使ってきたかが分かる結果となった。

図表 10 方言や訛りが自然と出てくるか
(第一調査における)



図表 11 方言や訛りが自然と出てくるか
(第二調査における)

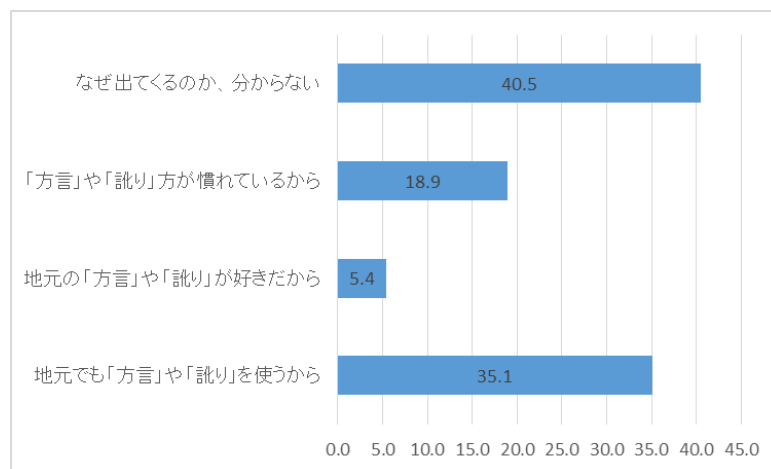


第二調査では、第一調査と同様に Q3 において「ある」と答えた回答者のみに対して、大学において方言や訛りが自然に出てくるかがあるかを聞いた。前述したように、第一調査の結果を元に選択肢を増やした。結果は上記の図表 11 のようになった。「よく出てくる」と答えた人が 21.5% (17 人)、「ときどき出てくる」と答えた人が 39.2% (31 人)、「あまり出てこない」と答えた人が 20.3% (16 人)、「全く出てこない」と答えた人が 19.0% (15 人)、無回答が 56 人であった。この結果から、「よく出てくる」と「ときどき出てくる」という回答を合わせると 60.7% (48 人) となり、回答者の半数以上が方言や訛りが出てくるかがあるということが分かった。

それに対して「全く出てこない」と「あまり出てこない」という回答を合わせると 39.3% (31人) となることから、第一調査に比べて方言や訛りが出てこないという回答の割合が高いことが分かった。

また第二調査では、Q4 において「よく出てくる」、「ときどき出てくる」と答えた回答者のみにそれはなぜなのかを Q5 において質問した。第一調査の結果を元に「地元でも「方言」や「訛り」を使うから」、「地元の「方言」や「訛り」が好きだから」、「「方言」や「訛り」の方が慣れているから」、「なぜ出てくるのか、分からない」、「その他」の計 5 つの選択肢を設けた。結果は下記の図表 12 ようになった。「地元でも「方言」や「訛り」を使うから」と答えた人は 35.1% (13 人)、「地元の「方言」や「訛り」が好きだから」と答えた人は 5.4% (2 人)、「「方言」や「訛り」の方が慣れているから」と答えた人は 18.9% (7 人)、「なぜ出てくるのか、分からない」と答えた人は 40.5% (15 人) であった。この結果から、「なぜ出てくるのか、分からない」と回答した人の割合が最も大きく、その次に「地元でも「方言」や「訛り」を使うから」の回答の割合が大きいことが分かった。それに対して一番割合が小さかったのが「地元の「方言」や「訛り」が好きだから」の回答だったことから、回答者のほとんどは地元に対して、または方言や訛りに対して興味関心が薄いのではないかと考えられる。

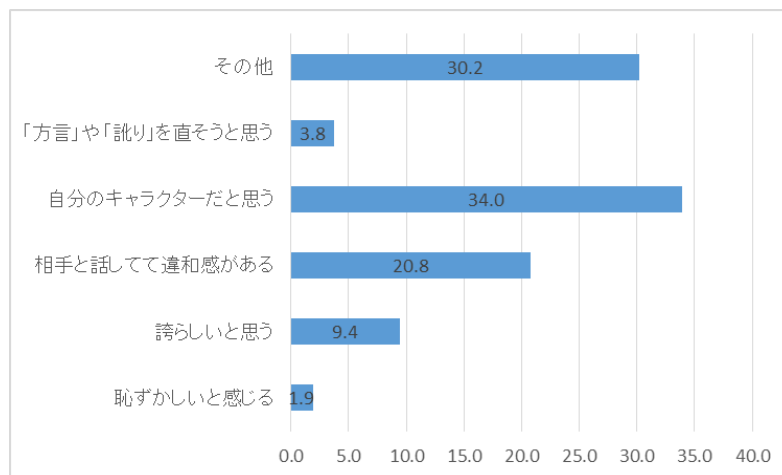
図表 12 方言や訛りが出てくる理由



また、「よく出てくる」、「ときどき出てくる」と答えた回答者のみに対するもう一つの質問として、会話中に方言や訛りが出てきたらどう思うのかを質問した。Q5 と同様に第一調査を元に選択肢を設けた。選択肢は「恥ずかしいと感じる」、「誇らしいと思う」、「相手と話してて違和感がある」、「自分のキャラクターだと思う」、「「方言」や「訛り」を直そうと思う」、「その他」の計 6 つである。選択肢に偏りが無いよう、方言や訛りに対して前向きな意見の選択肢と後ろ向きの意見の選択肢を設けた。結果は下記の図表 13 のようになった。「恥ずかしいと感じる」と答えた人が 1.9% (1 人)、「誇らしいと思う」と答えた人が 9.4% (5 人)、「相手と話してて違和感がある」と答えた人が 20.8% (11 人)、「自分のキャラクターだと思う」と答えた人が 34.0% (18 人)、「「方言」や「訛り」を直そうと思う」と答えた人が 3.8% (2 人)、「その他」と答えた人が

30.2%（16人）であった。「その他」の回答としては、「特にない」、「何とも思わない」という回答だった。この結果から、「自分のキャラクターだと思う」と回答した人の割合が最も高く、一番割合の小さかった回答が「恥ずかしいと感じる」であった。自然に大学で方言や訛りが出てしまった時に「自分のキャラクター」だと思うという回答の割合が一番大きかったことは予想外であり、出てしまった時の恥ずかしさはあまり感じないことが分かりこのことに関しても予想とは異なった結果となった。

図表 13 方言や訛りが出てきたときにどう思うか



また、第二調査では生まれたエリア、育ったエリアのそれぞれで方言や訛りが出てきたときにどう思うかをクロス集計表で整理したところ、下記の図表 14、15 のような結果となった。カイ二乗検定の結果、生まれたエリアにおいては、5%水準で有意に関連が見られ ($\chi^2(40)=86.570, p<.05$)、育ったエリアにおいても、5%水準で有意に関連が見られた ($\chi^2(30)=60.650, p<.05$)。

図表 14 生まれたエリア別における方言や訛りが出てきた時にどう思うか クロス表

		出てきたときにどう思うか					合計	
		恥ずかしいと感じる	誇らしいと思う	相手と話してて違和感がある	自分のキャラクターだと思う	「方言」や「訛り」を直そうと思う		その他
生まれたエリア	北海道	0	0	0	1	0	0	1
		0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	その他	0	0	0	0	0	1	1
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
	東北	0	0	0	1	0	0	1
		0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	関東	0	3	7	13	0	12	35
		0.0%	8.6%	20.0%	37.1%	0.0%	34.3%	100.0%
	北陸	0	1	2	1	0	0	4
		0.0%	25.0%	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東海	0	0	2	1	1	2	6
		0.0%	0.0%	33.3%	16.7%	16.7%	33.3%	100.0%
近畿	0	1	0	0	0	0	1	
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
中国	1	0	0	0	0	0	1	
	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
九州	0	0	0	1	1	1	3	
	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	33.3%	100.0%	
合計		1	5	11	18	2	53	
		1.9%	9.4%	20.8%	34.0%	3.8%	100.0%	

図表 15 育ったエリア別における方言や訛りが出てきた時にどう思うか クロス表

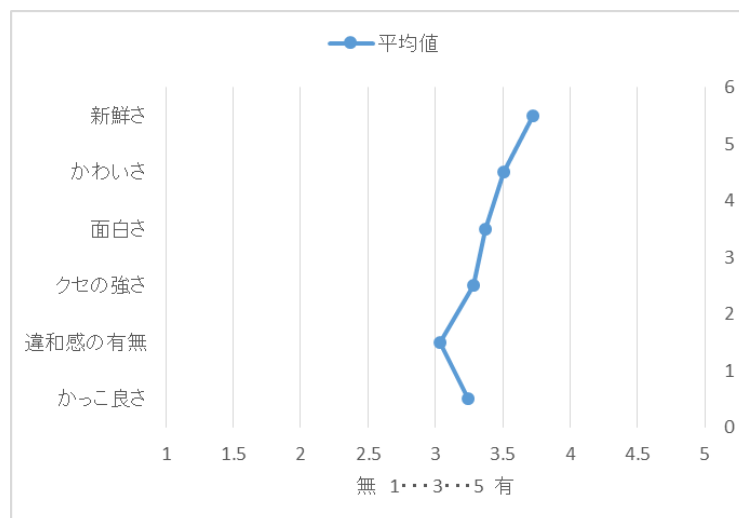
		出てきたときにどう思うか					合計	
		恥ずかしいと感じる	誇らしいと思う	相手と話してて違和感がある	自分のキャラクターだと思う	「方言」や「訛り」を直そうと思う		その他
育ったエリア	北海道	0	0	0	1	0	0	1
		0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	その他	1	0	0	0	0	1	2
		50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
	関東	0	3	7	14	0	12	36
		0.0%	8.3%	19.4%	38.9%	0.0%	33.3%	100.0%
	北陸	0	1	2	1	0	0	4
		0.0%	25.0%	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	東海	0	0	2	1	1	2	6
		0.0%	0.0%	33.3%	16.7%	16.7%	33.3%	100.0%
	近畿	0	1	0	0	0	0	1
		0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
九州	0	0	0	0	1	1	2	
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	100.0%	
合計		1	5	11	17	2	52	
		1.9%	9.6%	21.2%	32.7%	3.8%	100.0%	

3-4. 回答者以外の方言や訛りの使用について

次に第二調査では、友達が会話の中でとっさに方言や訛りを使ったら回答者はどう思うのかを質問した。質問形式は5段階評定で（かなり=5、やや=4、どちらでも=3、やや=2、かなり=1）とし、その印象がない=1、その印象がある=5とした。「かっこ良さ（かっこ良い・かっこ悪い）」、「違和感の有無（違和感がある・違和感がない）」、「クセの強さ（クセが強い・クセがない）」、「面白さ（面白い・面白くない）」、「かわいさ（かわいい・かわいくない）」、「新鮮さ（新鮮・ありふれている）」でそれぞれ測定し、平均値を出した。グラフでは各印象の測定結果を分かりやすく示すため、例として「かっこ良さ」であれば「かっこ良い」を「有」と「かっこ悪い」を「無」としている。

結果は下記の図表 16 のようになった。「かっこ良さ」では平均値が 3.24（標準偏差 0.73）、「違和感の有無」では平均値が 3.03（標準偏差 1.08）、「クセの強さ」では平均値が 3.28（標準偏差 0.89）、「面白さ」では平均値が 3.37（標準偏差 0.86）、「かわいさ」では平均値が 3.51（標準偏差 0.91）、「新鮮さ」では平均値が 3.73（標準偏差 1.02）であった。この結果から、各項目の平均値を比較すると差がそこまでないことが分かった。また、全体としては「新鮮さ」が最も 5 の値に近く、「違和感の有無」が最も 1 に近いことが分かった。

図表 16 友達が方言や訛りを使った時の印象の平均値



3-5. 方言による文章および音声の印象の違いについて（分散分析）

第二調査においては、Q10～Q15にて福島弁、富山弁、長崎弁の三つに分けて印象を調査した。調査方法として、方言に対する評価を測定するための文章の調査と音声を流してイントネーションなどを聞いてもらう音声の調査をそれぞれ分けて調査した。文章の調査では「かっこ良さ（かっこ良い・かっこ悪い）」、「言いやすさ（言いやすい・言いにくい）」、「違和感の有無（違和感がある・違和感がない）」、「クセの強さ（クセが強い・クセがない）」、「面白さ（面白い・面白くない）」、「かわいさ（かわいい・かわいくない）」、「新鮮さ（新鮮・ありふれている）」の印象を設け、音声の調査では「意味が通じるか（意味が通じる・意味が通じない）」、「言いやすさ（言

「いやすい・言いにくい」、「違和感の有無（違和感がある・違和感がない）」、「クセの強さ（クセが強い・クセがない）」、「面白さ（面白い・面白くない）」、「新鮮（新鮮・ありふれている）」の印象を設けて質問した。

文章と音声をつつにまとめて福島弁・富山弁・長崎弁で印象の評価に違いがあるのではないかを検討するため、1 要因 3 水準被験者間分散分析を実施したが、有意な差は見られなかった。そこで、印象を一つずつに分けて福島弁・富山弁・長崎弁で印象の評価に違いがあるのかを検討するために一変量の分散分析をしたが、この分析でも有意な差は見られなかった。このことから、今回の調査では文章においても、音声においても、印象の評価に違いは得られなかった。

3-6. 回答者の出身地の方言や訛りの有無による文章および音声の印象の違いについて

方言別に違いを見たところ有意な差がなかったため、比較対象を変更して回答者の出身地における方言や訛りの有無によって文章と音声それぞれで違いが見られるかを検討するため、方言や訛りの有無を従属変数として印象の 1 要因 3 水準被験者間分散分析を実施した。その結果、文章の調査において福島弁では、「クセの強さ」に有意な差が見られた ($F(2, 127)=4.28, p<.001$)。富山弁では、「言いやすさ」に有意な差が見られた ($F(2, 126)=3.25, p<.001$)。そして長崎弁では、「かっこよさ」に有意な差が見られた ($F(2, 126)=3.77, p<.001$)。(図表 17)

しかし、音声の調査においては有意な差は見られなかった。このことから、出身地における方言や訛りの有無によって文章においては印象に違いが見られることが言えるが、音声に関しては違いが見られないと言える。

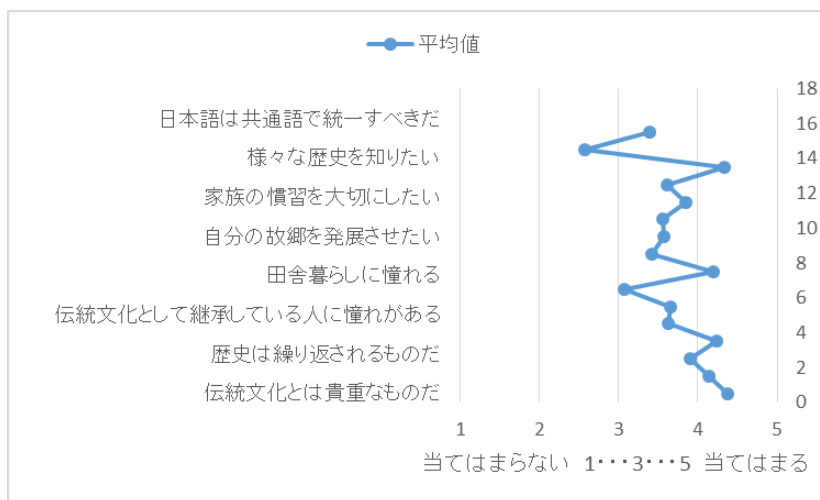
図表 17 有意な差が見られた回答者の出身地の方言と訛りの有無の印象の違い

		n	平均値	標準偏差	F値	自由度	有意確率
福島弁・クセの強さ	ある	71	3.82	1.175	4.281	2,127	0.016
	ない	39	3.13	1.341			
	分からない	20	3.35	1.137			
富山弁・言いやすさ	ある	71	2.06	0.876	3.248	2,126	0.042
	ない	38	2.26	1.083			
	分からない	20	2.65	0.813			
長崎弁・かっこよさ	ある	71	2.75	0.788	3.769	2,126	0.026
	ない	38	2.84	0.718			
	分からない	20	3.25	0.444			

3-7. 文化に関する意識

文化に関する意識を回答者はどのように持っているのかを検討するため、5 段階評定で 16 の文を設けた。回答者の回答の平均が下記の図表 18 である。平均値として 16 のうち 15 の文に退位しては「当てはまる」に近い結果となったが、「様々な歴史を知りたい」は「当てはまらない」に近い結果となった。

図表 18 文化に関する意識の平均値



次に、文化に関する 16 の質問に対してそれぞれの平均点を算出し、バリマックス回転を用いて主成分分析による因子分析を行った。(図表 19)

図表 19 文化に対する意識の主成分分析

因子	第一因子 古くからあるもの	第二因子 独自性	第三因子 歴史
自分の故郷を発展させたい	0.829	0.112	0.193
家族の慣習を大切にしたい	0.801	0.192	0.042
故郷の祭りを発展させたい	0.760	0.111	0.195
自分の故郷が好きだ	0.722	0.347	0.123
昔からあるものを伝承したい	0.605	0.315	0.399
伝統文化とは貴重なものだ	0.175	0.804	0.149
個性は大事だ	0.254	0.731	0.161
地域特有のものは残すべきだ	0.161	0.729	0.266
旅行をして様々な文化を感じたい	0.193	0.669	0.382
文化の多様性は大事だ	0.215	0.651	0.334
日本語は共通語で統一すべきだ	0.416	-0.479	0.159
様々な歴史に興味がある	0.073	0.228	0.831
様々な歴史を知りたい	0.257	0.229	0.766
田舎暮らしに憧れる	0.399	-0.096	0.530
伝統文化として継承している人に憧れがある	0.329	0.324	0.512
歴史は繰り返されるものだ	0.019	0.285	0.507
固有値	3.510	3.397	2.729
寄与率	21.940	21.230	17.055
累積寄与率			60.225

第一因子には、「自分の故郷を発展させたい」、「家族の慣習を大切にしたい」、「故郷の祭りを発展させたい」、「自分の故郷が好きだ」、「昔からあるものを大切にしたい」といった、『むかしからあるものを大事にする』とするものが高い因子寄与率で抽出された。第二因子には、「伝統文化とは貴重なものだ」、「個性は大事だ」、「地域特有のものは残すべきだ」、「旅行をして様々な文化を感じたい」、「文化の多様性は大事だ」、「日本語は共通語で統一すべきだ」といった、『独自性を大事にする』とするものが抽出された。第三因子には、「様々な歴史に興味がある」、「様々

な歴史を知りたい」、「田舎暮らしにあこがれる」、「伝統文化として継承している人に憧れがある」、「歴史は繰り返されるものだ」といった、『歴史に関すること』とするものが第一因子、第二因子と比べて低い因子寄与率で抽出された。このことから3-7にて「様々な歴史を知りたい」は「当てはまらない」に近い結果となったことも受けて、「歴史に関すること」に関しては当てはまらない人も一定数いたことがわかった。

3-8. 各方言の文章と音声の印象の違い

次に、各方言の文章と音声の印象の違いはあるのだろうか。そこで、方言によって言いやすさ、違和感の有無、クセの強さ、面白さ、新鮮さの平均値に違いがあるかを検討するため対応のあるt検定を行った。(図表 20) その結果、面白さの福島弁の平均値の間に有意な差が見られた($t(127)=1.996, p<.01$)。しかし、それ以外の言いやすさ、違和感の有無、クセの強さ、福島弁以外の面白さ、新鮮さの間に有意な差は見られなかった。これらのことから、福島弁の面白さにおいては音声よりも文章のほうが面白いといえるが、福島弁以外の方言、そして福島弁その他の印象においては文章と音声に大きな違いがあるとは言えない。

また、有意な差があった福島弁の面白さについてだが、音声にすることによってイントネーションなどを聞くことができ、面白さが増すのではないかという予想を立てていたが、イントネーションはあまり関係がないということが結果から分かった。

図表 20 各方言の文章と音声の印象の t 検定

	方言	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
言いやすさ	福島弁	-.180	1.104	-1.841	127	n.s.
	富山弁	-.078	.961	-.920	127	n.s.
	長崎弁	-.102	1.026	-1.120	127	n.s.
違和感の有無	福島弁	-.180	1.180	-1.723	127	n.s.
	富山弁	-.117	1.127	-1.177	127	n.s.
	長崎弁	-.055	1.064	-.584	126	n.s.
クセの強さ	福島弁	.188	1.315	1.614	127	n.s.
	富山弁	.095	1.305	.819	125	n.s.
	長崎弁	.070	1.059	.751	127	n.s.
面白さ	福島弁	.188	1.063	1.996	127	*
	富山弁	.156	1.015	1.741	127	n.s.
	長崎弁	.133	.797	1.884	127	n.s.
新鮮さ	福島弁	-.008	1.144	-.078	126	n.s.
	富山弁	.078	1.024	.863	127	n.s.
	長崎弁	0.000	.931	0.000	127	n.s.

4. 考察・まとめ

今回の調査では、総じて予想していた結果とはいかず、仮説と異なる結果となったように思える。仮説と異なった結果となったこととして大きく三つ挙げると、一つ目は関東地方の出身者が多かったことを受け、「方言や訛りがある」という割合は低いのではないかと思ったが方言や訛りが「ある」という割合が高いという結果になったこと。二つ目は、方言や訛りが「ある」と答

えた人で、自分から方言や訛りが出てきた時にどう思うかにおいては恥ずかしいと思う人も一定数いると予想していたが、「恥ずかしいと感じる」と回答した人の割合は一番低かったこと。そして三つ目は、文章と音声で違いがあると予想していたが音声で測っても有意な差は得られず、方言と訛りに関する印象の違いは音声であっても文章とさほど変わらないことが分かったことだ。この結果を受けて自分の予想とは逆の結果となった。このことは、逆に方言や訛りに対しての新しい考えを得ることができたように思える。5段階評定の結果などを通して考えたこととして、現在の大学生は方言と訛りに対して肯定的に捉えているのではないだろうかという結論に至った。

参考文献として挙げた酒寄の研究では、各地（大阪・博多・茨城）の方言によって印象や聞こえ方が違うと結論付けられているが、今回の調査では印象の違いを、文章においても、音声においても明確に確認できなかった。酒寄の調査方法は私とは違い、Google フォームによるオンラインアンケート、フォーカスグループインタビューを用いている。今回の調査の反省点として、第一調査、第二調査とも学年・学部により偏りがあったことや、大人数の回答者に対する調査となったので集中して回答が出来なかったのか、欠損値が多い回答が目立ったことが挙げられる。方言や訛りの調査において方言による印象の違いや文章と音声の印象の違いをみたい場合は、酒寄のようにオンラインアンケートを行って学年・学部により偏りなく調査することや、フォーカスグループインタビューのように個人個人にじっくりと質問をするといった、より範囲を広げた調査のほうが有意な調査となったのではないかと感じた。

そのような中で、回答者の考えを引き出したのが第二調査の Q16 の文化に関する質問だった。Q16 の因子分析の結果では、全体として昔からあるものを大事にする傾向にあることから、自分の故郷に対して好意的であるのだろう。また、各方言の印象の調査においては福島弁が「クセがある」という結果が有意な結果となり、それに対して福島県から距離が遠く離れた長崎弁は「かっこよさ」が有意な結果となったことに対しては関西弁の方が「かっこいい」という予想と同じ結果となり、やはり全国的に多くの人に浸透していない方言や訛りに対しては下向きな意見が目立つという結果になりうると言えよう。

5. 参考文献

・違いの分かる事典 「方言」と「訛り（なまり）」の違い

<https://chigai->

[allguide.com/%E6%96%B9%E8%A8%80%E3%81%A8%E8%A8%9B%E3%82%8A%EF%BC%88%E3%81%AA%E3%81%BE%E3%82%8A%EF%BC%89/](https://chigai-allguide.com/%E6%96%B9%E8%A8%80%E3%81%A8%E8%A8%9B%E3%82%8A%EF%BC%88%E3%81%AA%E3%81%BE%E3%82%8A%EF%BC%89/)

・酒寄祐希 (2018) 「方言イメージに関する調査 ～メディアと方言の関連性から見える方言コスプレ像～」
『平成 29 年度卒業論文・卒業制作報告書集』文教大学情報学部メディア表現学科